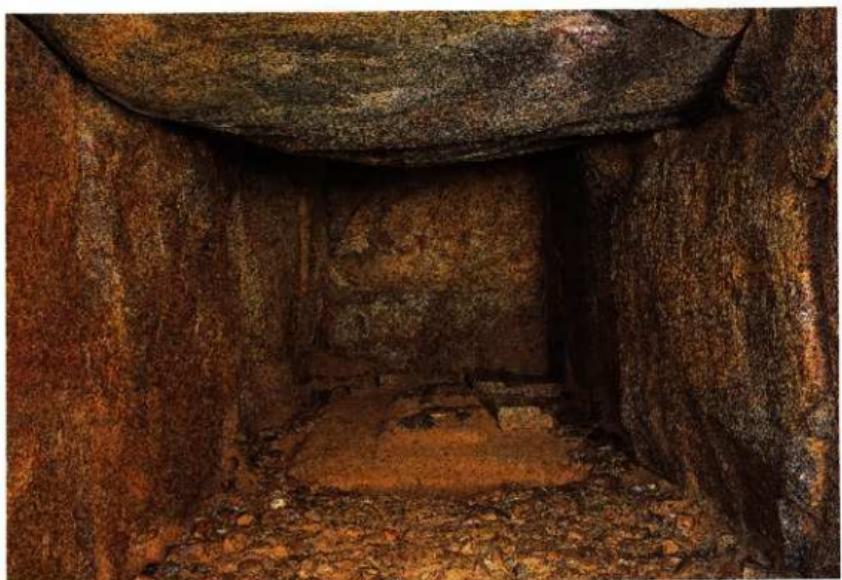


# 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 14

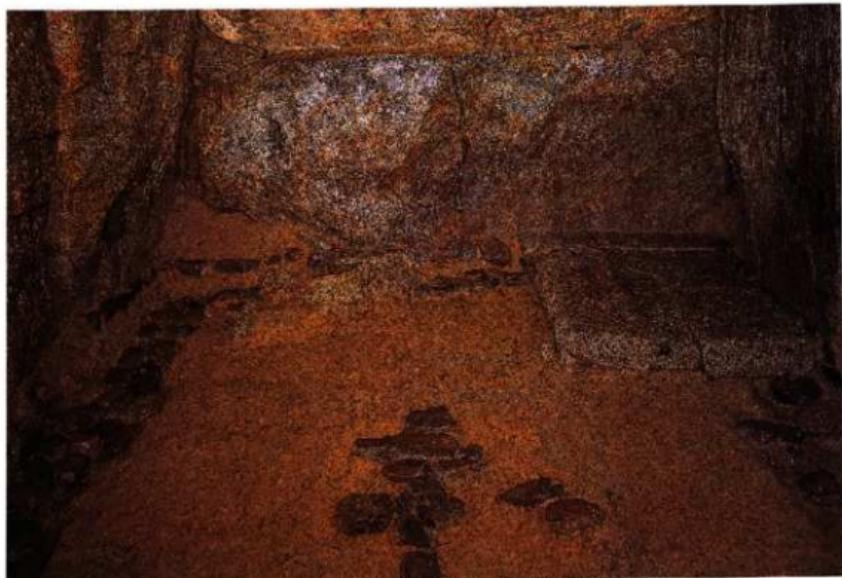
—平成12年度—

2001

香芝市教育委員会



1. 玄室内完掘状況（南から）



2. 玄室内奥壁沿いの凝灰岩敷石検出状況（南から）

## 序 文

本市は、奈良県北西部・奈良盆地の西端に位置し、古代の『万葉集』にもうたわれた二上山を背景に市域がひろがっています。

大阪都市圏に近接する地理的条件から、現在64,000を超える人口を擁するベッドタウンとして発展しており、今もなお人口増加の一途をたどっています。

その反面、古くから自然環境に恵まれ、今まで受け継がれてきた埋蔵文化財をはじめ、各種の文化財が数多く残されています。

なかでも、二上山北麓には二上山が産出するサヌカイトを利用した石器製作遺跡である二上山北麓遺跡群や市北部に所在する飛鳥時代の寺院跡と推定されている尼寺廃寺遺跡などは、ひろく学会に知られているところでございます。

このたび、平成12年度国庫補助金事業の一環として実施しました市内遺跡2件の発掘調査結果をとりまとめ、その発掘調査既報を発刊することとなりました。

この発掘調査を実施するにあたりまして、ご協力を賜わりました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆さまに深く感謝を申し上げますとともに、この調査既報が多くの方の目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただけますれば幸甚に存じます。

また、今後とも埋蔵文化財行政に邁進していく所存ですので、関係各位のよ  
り一層のご指導、ご協力をお願いする次第です。

平成13年3月

香芝市教育委員会

教育長 山田勝治

## 例　　言

- 1 本書は、国庫補助金事業として実施した奈良県香芝市平野1043番地他に所在する平野2号墳第2次調査1件と香芝市尼寺2丁目66-2・66-3番地に所在する尼寺北廐寺第16次発掘調査1件の合計2件の発掘調査の成果をまとめた概要報告書である。
- 2 発掘調査は、平成12年度国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名：市内遺跡発掘調査

事業者：香芝市

調査担当：香芝市教育委員会事務局 生涯学習課 香芝市二上山博物館

- 3 本書の挿図の座標値は国土座標第VI座標系による。また、標高は海拔高で示している。
- 4 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録一切及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17-17）内で保管している。
- 5 現地調査及び出土遺物の検討等の本書作成に関しては、下記の方々より有益な御教示・御指導を戴きました。御芳名を記して感謝の言葉にかえさせて頂きます。（50音順。敬称略）

荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、石田成年（柏原市教育委員会）、泉森皎（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、泉武（天理市教育委員会）、伊藤聖浩（羽曳野市教育委員会）、今尾文昭（奈良県立橿原考古学研究所）、遠藤啓輔（奈良大学大学院）、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所）、奥田尚（八尾市立刑部小学校）、勝部明生（竜谷大学）、金松誠（奈良大学大学院）、河上邦彦（奈良県立橿原考古学研究所）、神庭滋（新庄町教育委員会）、木許守（御所市教育委員会）、小泉俊夫（香芝市文化財保護審議会会長）、木下亘（奈良県立橿原考古学研究所）、木場幸弘（高取町教育委員会）、清水昭博（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、辰巳弘（同志社大学）、中岡敬善、西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、塚口義信（堺女子短期大学）、西山要一（奈良大学）、長谷川透（奈良大学）、林部均（奈良県立橿原考古学研究所）、広瀬和雄（奈良女子大学）、藤田和尊（御所市教育委員会）、宮原晋一（奈良県立橿原考古学研究所）、安村俊史（柏原市教育委員会）、矢野達生（ふたかみ史遊会会长）、山本彰（大阪府立近つ飛鳥博物館）、森隋夫（帝塚山大学）、和田晴吾（立命館大学）

## 目 次

### 序文

I 国庫補助金事業について.....	1
1 国庫補助金事業の経過.....	1
2 平成12年度国庫補助金事業の概要.....	1
II 平野2号墳第2次調査.....	2
1 位置と環境.....	2
2 調査の経過.....	4
3 調査の概要.....	5
(1) 横穴式石室.....	5
(2) 玄室内部の構造について.....	6
(3) 棺について.....	11
(4) 築造時期について.....	11
4 出土遺物.....	11
(1) 中世・近世の遺物.....	11
(2) 古墳時代の遺物.....	12
5 調査の成果.....	13
III 尼寺北廃寺第16次調査.....	15
1 位置と環境.....	15
2 調査の概要.....	15
3 調査の成果.....	16

## 挿図目次

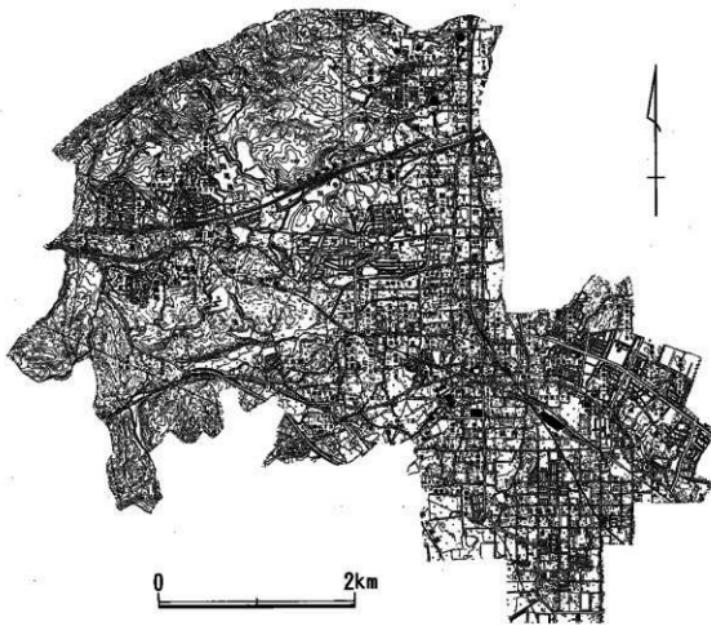
図1 平成12年度国庫補助金事業に伴う発掘調査地位置図 (S = 1 / 50,000)	
図2 平野1・2号墳周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 20,000) .....	2
図3 平野古墳群分布図 (S = 1 / 5,000) .....	3
図4 平野2号墳発掘調査区位置図 (S = 1 / 400) .....	4
図5 平野2号墳横穴式石室位置図 (S = 1 / 200) .....	5
図6 平野2号墳横穴式石室実測図 (S = 1 / 40) .....	7・8
図7 玄室内凝灰岩敷石S-2~6検出状況細景.....	9
図8 平野2号墳玄室内平面・断面図 (S = 1 / 30) .....	10
図9 調査地位置図 (S = 1 / 1,000) .....	15
図10 A トレンチ平面図、北・南壁断面図、B トレンチ北壁断面図.....	16

## 表 目 次

表1 平成12年度国庫補助金事業に伴う発掘調査地一覧

## 図 版 目 次

- 卷頭図版 1 玄室内完掘状況（南から）  
2 玄室内奥壁沿いの凝灰岩敷石検出状況（南から）
- 図版 1 1 羨道完掘状況（南から）  
2 玄室より羨道を望む（北から）
- 図版 2 1 調査前の状況（東から）  
2 羨道天井石・側壁検出状況（南から）  
3 羨道土層堆積状況（南から）
- 図版 3 1 玄門付近羨道土層堆積状況（南から）  
2 玄室・羨道内調査前の状況（北から）  
3 玄室内表層除去後の炭層内銭貨出土状況（南から）
- 図版 4 1 玄室内瓦器碗等の中世土器出土状況（西から）  
2 玄室内凝灰岩・埠出土状況（西から）  
3 玄室内調査過程・遺物出土状況（南から）
- 図版 5 1 玄室内完掘状況（南から）  
2 棺台基礎検出状況（南から）  
3 玄室内排水溝・棺台基礎等検出状況（北から）
- 図版 6 1 玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石検出状況（南から）  
2 玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石及び玄室西側壁と凝灰岩敷石との隙間を詰める小石の検出状況（東から）  
3 玄室棺台東側の凝灰岩敷石検出状況（西から）
- 図版 7 1 羨道西側壁（東から）  
2 羨道西側壁を玄室東側から望む（北東から）  
3 玄室西側壁を羨道東側から望む（南東から）
- 図版 8 1 羨道東側壁（西から）  
2 羨道東側壁を玄室西側から望む（北西から）  
3 玄室東側壁を羨道西側から望む（南西から）
- 図版 9 平野2号墳第2次調査出土遺物
- 図版10 1 Aトレンチ回廊検出状況（北から）  
2 Aトレンチ北壁断面（南から）  
3 Bトレンチ全景（南西から）



第1図 平成12年度国庫補助金事業に伴う発掘調査地位置図 (S=1/50,000)

表1 平成12年度国庫補助金事業に伴う発掘調査地一覧

No	遺跡名	調査次数	調査地番	調査期間	調査面積
1	平野2号墳	第2次	平野1043番地	平成12年7月11日～ 平成13年3月30日	36m <sup>2</sup>
2	尼寺北庵寺	第16次	尼寺2丁目66-2・ 66-3	平成12年8月9日～8月24日	30m <sup>2</sup>

## I 国庫補助金事業について

### 1 国庫補助金事業の経過

香芝市では、近年急増する開発行為に対して文化財保護の観点から昭和56年度以来、毎年国庫補助金事業による市内遺跡発掘調査を継続的に実施している。その目的は、各遺跡の実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用住宅建築に対処するためである。

昭和56年度～平成2年度までは旧石器時代を中心とする二上山北麓遺跡群を中心に調査がすすめられ、貴重な成果を得た。

平成3年度から平成9年度までは尼寺廃寺（尼寺北廃寺・尼寺南廃寺）の寺域の範囲確認調査を実施し、なかでも、平成7年度に尼寺北廃寺で実施した第10次調査では、日本で最大級の塔心礎が検出され、心礎の柱座内から12個の金環や水晶玉4点、ガラス玉3点、刀子1点等の舍利莊嚴具を検出するなど多大な成果を得た。<sup>1)</sup>

平成11年度からは新たに3年事業計画で平野1号墳（平野車塚古墳）・平野2号墳の範囲確認調査を計画・実施している。事業初年度の平成11年度は、実態の不明であった平野1号墳（平野車塚古墳）・平野2号墳の地形測量調査を実施し、詳細な地形測量図面を作成した。

この結果、平野1号墳は、従来から推測されてきたような方墳ではなく、円墳である可能性が高いことが明らかとなった。また、平野2号墳については、第1次調査の結果、復元推定直径約26m前後、高さ約6.5mの円墳で、版築技法により墳丘が構築されていることや横穴式石室の羨道部の左右側壁の一部を検出するに至り、内部主体部は横穴式石室であることを確認した。<sup>2)</sup>

### 2 平成12年度国庫補助金事業の概要

平成12年度は、個人住宅建築に伴う事前調査としては、香芝市北部に所在する尼寺北廃寺の発掘調査（第16次調査）1件を実施した。その結果、東面北回廊に伴う中門の基壇の一部と推定される遺構を検出した。

また、保存に伴う範囲確認調査としては、継続事業として昨年度に続き香芝市北部に所在する平野2号墳の発掘調査（第2次調査）1件を実施した。

今年度は、平成11年度の第1次調査で検出した横穴式石室の羨道を調査し、その結果、これまで一般に全く知られていないかった横穴式石室を1基検出した。石室内部は中・近世に盗掘を受けており、顯著な副葬品等は検出されなかったが、玄室の床面に凝灰岩を敷いた特殊な構造をもつ横穴式石室であることを確認した。

## II 平野 2 号墳第 2 次調査

### 1 位置と環境

平野 1 号墳（平野車塚古墳）・平野 2 号墳は、香芝市北部の香芝市平野 1197 番地に所在する。古墳は、明神山（標高 274m）の北西から南東方向へ緩やかに派生する標高 60m 前後の低丘陵上に立地しており、丘陵東側の丘陵末端部に平野 1 号墳が、心々距離にして約 38m の間隔をおいて西方に平野 2 号墳が築造されている。

同丘陵上の南東斜面には東西約 330m の範囲にわたって消滅した古墳も併せて約 6 基の古墳が分布していたことが推定されており、平野古墳群と呼称されている。平野古墳群は、平野 1・2 号墳を東端として古墳群の中央部に消滅した平野 3・4 号墳の他、古墳群の西端には二上山の産出する凝灰岩の切石を使用した横口式石室として著名的な平野塚穴山古墳（国指定史跡）等の 7 世紀代を中心とする終末期に築造された古墳とで構成されている。

これらの古墳は、地元に残された江戸時代の古絵図から平野 3・4 号墳は武烈天皇陵として、平野塚穴山古墳は顯宗天皇陵として治定されており、平野 1・2 号墳は御廟所としての取り扱いを受けていたことがうかがえる。

古墳の周辺の遺跡としては、平野 2 号墳の北西約 100m には須恵器や瓦を焼成したと推定される地下式の有段登窯を有する平野窯跡群が所在する。また、北東約 200m には 7 世紀後半の創建が考えられる尼寺北廃寺等の 7 世紀を中心とした遺跡が集中しており、平野古墳群と平野窯跡群、尼寺廃寺についてはその盛衰に密接な関係があると考えられている。



図 2 平野 1・2 号墳周辺の遺跡分布図 (S=1/20,000)

### 【平野1号墳（平野車塚古墳）】

平野古墳群の中でも最も東側の丘陵の東端部に構築された古墳である。古墳の北側と東側は既に宅地化しており、南側の羨道部付近や墳丘の西側の一部が土砂採集によって削平されて墳丘は著しく崩壊している。これまでには、一辺20m、高さ3.5mの方墳と推定されていたが、平成11年度に実施した地形測量調査から円墳と推定される。

主体部は南方に開口した横穴式石室で、方位は西へ5度振っている。横穴式石室は、墳丘の中心からやや南側に築かれており、全長（残存長）9.2m、玄室幅2.8m、長さ3.5m、現在の堆積土（床面）からの高さは2m、左右の袖部の長さは0.5~0.6mを測る。玄室は、主として比較的面の整った花崗岩の巨石を2段積にして構築しており、2石目で内側へ緩やかに持ち送りを行っている。天井には2枚の巨石を架構しており、側石の隙間には小石を詰めている。羨道部は面の整った花崗岩の巨石を1列に4石並べ、天井には2枚の巨石を架構しており、羨道幅1.8m、高さ1.8mを測る。

とくに玄室の平面規格は高麗尺の長さ10尺×幅8尺に設計して構築されたことが想定されており、また、石室の平面形態が正方形に近いことや奥壁・玄室・羨道の側壁の石積技法から7世紀前半に築造された古墳と考えられている。

### 【平野2号墳】

平野古墳群の東側の丘陵南斜面、平野1号墳の西方に築かれている。古墳の北方・西方・南方は宅地造成によって削平されており、かろうじて墳丘の東側のみが旧地形を止めている。

調査前は、直径20m、高さ3mの円墳と推定されていたが、平成11年度の発掘調査で直径26m、高さ6.5mの円墳で、版築技法により古墳が構築されていることが確認された。



図3 平野古墳群分布図 (S = 1/5,000)

## 2 調査の経過

今年度は、両古墳の敷地内に生息した雑草や根株の除去後、平成11年度に平野2号墳の墳丘南側の第4調査区内で検出した羨道部南端と推定される左右側壁の中心部を主軸として、第4調査区に沿って南北4m×東西3.8mの調査区を1箇所設定して北方に遺存すると推定される横穴式石室の羨道部の左右側壁や天井石、玄室の検出を主眼として人力により発掘調査を実施した。

そして、羨道部の左右側壁と天井石の検出状況によって順次調査区域を拡張していくこととした。調査が進行していくにつれて羨道部の南端は、左右側壁が遺存しているのみで羨道の天井石は抜き取られて土砂が厚く堆積している可能性が強いことが判明し、また、墳丘南側は地形的な制約から羨道部から横位に掘削して土砂を搬出することが不可能であったため、墳丘上部の羨道の天井石の抜き取られた箇所から掘削し、羨道の天井石を検出して侵入可能な状態になった段階で羨道を横位に侵入して発掘調査を進めることとした。

横穴式石室内部の調査は、石室中央部に南北方向の主軸を設定し、この南北の主軸を介して東西それぞれ1m四方の調査区を計30箇所設定した。

調査は、調査区ごとに堆積層序を重視しながら遺物の出土状況の図面を作成しつつ、また、遺物は調査区ごとに出土番号を明記して取り上げた。

各調査区内に堆積していた土砂は、石室外に搬出して、全て3mm四方の網目のトーシで土器や凝灰岩、炭化物、凝灰岩、石等に分別して遺物の採集を行った。

現地調査は、平成12年7月11日に開始し、平成13年3月30日に終了した。調査区及び横穴式石室内の調査総面積は36m<sup>2</sup>で、実働日数は、約130日間を要している。

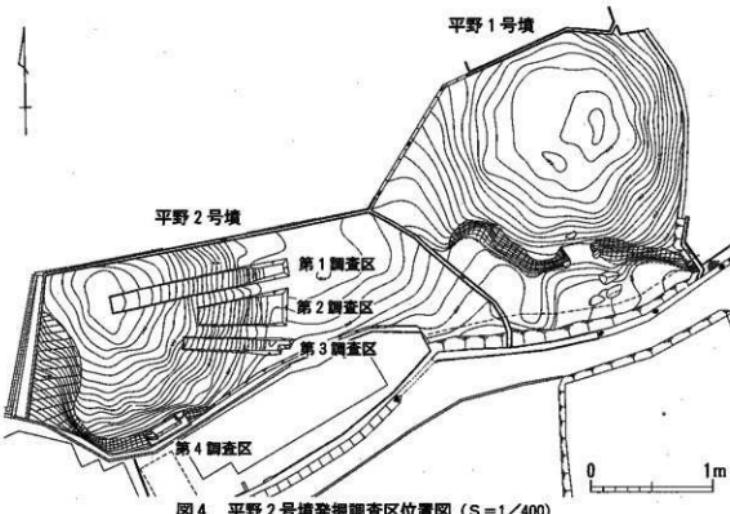


図4 平野2号墳発掘調査区位置図 (S=1/400)

### 3 調査の概要

#### (1) 横穴式石室

平野2号墳の主体部は、南西方向に開口する両袖式の横穴式石室であることが確認された。石室は、墳丘のやや南側に構築されており、全長約10.6m（残存値）を測る。古墳墳頂部での標高は59.7m、墳丘・裾部での標高は53.5mで、標高53.5m～53.1mに石室の床面が築かれている。

玄室規模は、長さ約3.8m、幅約2.5m、高さ約2.2mを測る。玄室は、右側壁は高さ約1.9m～2.3m、幅約1m～1.7mの3枚の巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てており、また、左側壁も高さ約1.9m～2.2m、幅約1m～1.8mの2枚の巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てているが、玄門から1石めのみ下段は高さ約1.4m、幅約1.3mの石を、上段は高さ約0.7m、幅約1.1mの石を2段にほぼ垂直に積んでいる。

奥壁は、2段積みで下段の基底石は高さ約0.8m、幅約2.5mの石を垂直に立て、上段には高さ約1.4m、幅約2.4mの石を2段に積んでおり、上下段の石の隙間に花崗岩の粉末を詰めている。

天井には、長さ約1.6m～1.8m、幅約2.5m以上の2枚の巨石を横架している。

羨道規模は、残存長約6.8m、幅約2.0m、高さは1.5m～1.7mを測る。羨道は、左右両側壁とも高さ約1.5m～1.7m、幅約0.8m～1.6mの巨石5枚をほぼ垂直に立てて構築されており、天井には玄門を含め3石分までは長さ約1.7m～2.2m、幅約2.2m以上の巨石2枚を横架している。玄門を含む玄門から4石から5石めは羨道側石のみで天井石は遺存せず、また、羨道側石は、南方にさらにもう一石程度あったものと推定されるが、後世の石材採取により遺存していなかった。

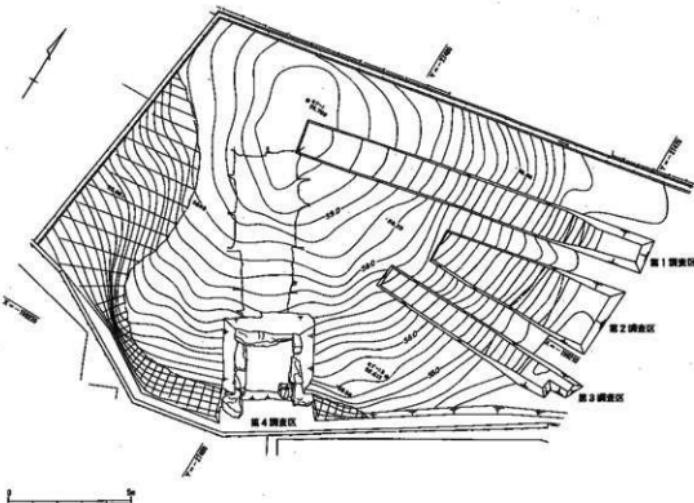


図5 平野2号墳横穴式石室位置図 (S=1/200)

羨道の床面全面には厚さ約10cmにわたって約10cm前後の小礫が敷き詰められていた。羨道北端の玄門付近の標高は約53.40m、羨道南端の標高は約53.10mを測る。標高差は約30cmを測り、玄室に近づくにつれて標高が高くなって行く。

羨道床面礫層の上面からは小礫の隙間に凝灰岩や須恵器の細片等が数点が出土したが、羨道を閉塞する閉塞石等は検出されなかった。

玄室・羨道を構築する石材は、全て平野2号墳より北方の北葛城郡王子町畠田周辺で採取される花崗岩が使用されており、羨道礫石は葛下川流域の河原石が使用されている。

石室の全体的な特徴として玄室の平面形態は長方形を指向するが、ほぼ同時期・同規模の大和の主要な横穴式石室を持つ古墳と比較すると、玄室の幅に比して玄室の長さが短く、正方形に近い平面規格を持つことが特徴的である。隣接する平野1号墳は、羨道は石を縱位に使っているものの、玄室は、左右側壁や奥壁とも石を横位に使って2段積で構成されている。平野1号墳と玄室の石積技法や持送り、袖の幅等の石室の形態等に時期的な差異がみられるものの、平野1号墳の玄室規模は、長さ約3.8m、幅約2.5mであるから玄室の平面形態や規模からみれば大和の主要な横穴式石室を持つ古墳の中では平野1号墳が最も類似すると思われる。

## (2) 玄室内部の構造について

### ① 棚台の基礎

玄室中央部には地山の赤褐色砂質土層の上に地山と同質の赤褐色砂質土層の土質と凝灰岩の粉砕片で築き固めた突出部が設けられていることが確認された。突出部の長さは上辺180cm、下辺210cm、幅は、上辺60cm~65cm、下辺75cm~82cm、床面からの高さは12cmを測り、平面形態は長方形を呈する。突出部の上面には部分的に15cm~25cm前後の安山岩の礫が置かれており、礫が埋められていた痕跡を示す窪みが遺存する箇所があることから、人々、この突出部全面に礫が敷かれていたものと思われる。この突出部は、玄室内での検出位置から棺を置くための棺台、あるいは、棺台を置くための基礎（土台）に相当する部分と推定される。

### ② 排水溝

排水溝は、棺台基礎を取り囲むように玄室の左右側壁と奥壁に沿って巡らされ、玄門仕切石想定地よりやや南側付近で東西の排水溝が連結して羨道中央部に配される。排水溝は、幅25cm~30cm、深さ5cm~15cmで断面形態は皿状や断面U字形を呈する。排水溝全面には棺台状の突出部に敷かれた礫よりもやや小さい15cm前後の扁平な安山岩の礫を敷いており、この上に凝灰岩の切石が敷設されていることから、暗渠排水溝として計画的に設置されたものと考えられる。

同時期の他の古墳の横穴式石室の排水溝の配置状況と比較すると、いずれも石棺の周囲を中心排水溝が巡らされて玄門より玄室内で連結することが多く、当古墳のように羨道側で交差することは希である。おそらく、玄室内の棺台基礎や凝灰岩敷石、玄門の仕切石との関係から玄室内で連結することが困難なため、このような排水溝の配置になったものと推定される。

### ③ 仕切石

左右側壁の玄門付近には直方体の延石を設置したと推定される痕跡が検出された。検出位置から仕切石状の施設が設置されていた可能性が考えられる。仕切石は、痕跡箇所に凝灰岩の細片が集積していたことから玄室内床面の敷石と同様の凝灰岩と考えられ、大きさは、その痕跡から長さ約190cm、幅約50cm前後と推定される。

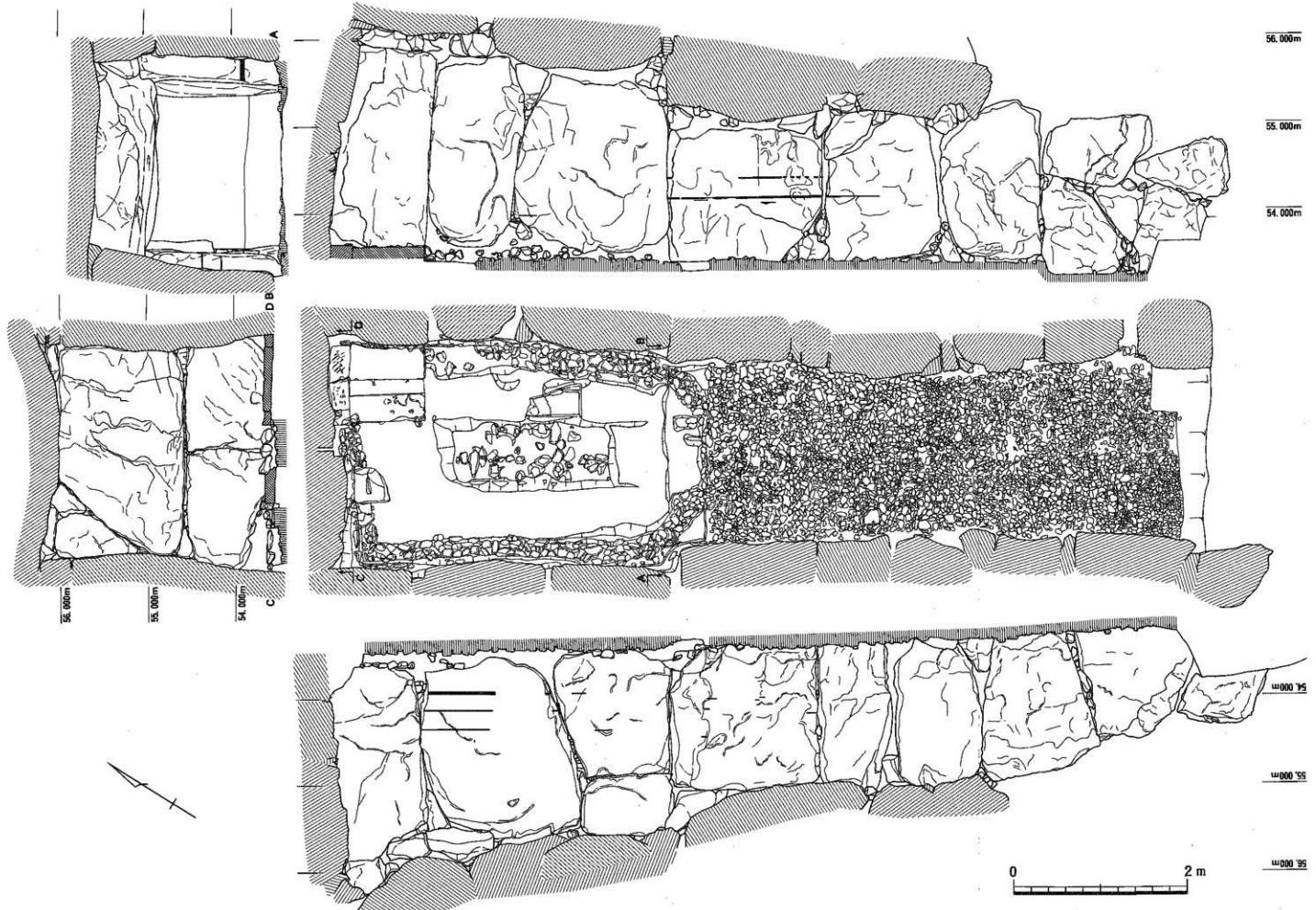


図6 平野2号墳横穴式石室実測図 ( $S=1/40$ )

#### ④凝灰岩敷石

玄室内の3箇所で凝灰岩製の切石が現位置で敷き詰められた状態で遺存していた。玄室奥壁沿いに敷かれたS-1や棺台基礎の東側に接して敷かれたS-7は採石時の破損により原形は止めていなかったが、玄室北東の奥壁沿いのS-2～S-6は原形を止めた状態で検出された。

このうち、唯一規格のわかる凝灰岩敷石S-2は、南北長さ85.8cm、東西幅48.7cm、厚さ13.3cmを測り、幅30cm、高さ2cmの突出部を作り出している。このS-2に接して北側の奥壁にはS-4～6が、S-2と東側の側壁沿いには壁の曲面に整合するように削り出された凝灰岩の切石S-3が敷かれている。さらにこの凝灰岩敷石S-3と東側壁との間には隙間を埋めるように偏平な安山岩の石が間詰石として詰められていた。

凝灰岩敷石S-2と同様の突出部を持つ敷石は、南方のS-7にもみられ、残存長65.0cm、残存幅37.0cm、厚さ15.2cmを測り、幅29.0cm、高さ2cmの突出部を作り出している。S-7とS-2の突出部の高さはほぼ水平で、いずれの敷石も凝灰岩の粉末を含有する地山の赤褐色砂質土層の土を敷いて高さを調節している。

これらの玄室内に敷かれた凝灰岩の切石S-1～7は、全て二上山麓の牡丹洞付近で産出する凝灰岩の岩質に類似する。

凝灰岩敷石S-2とS-7の突出部の位置が南北につながって揃うことや玄室左右側壁に沿って部分的に凝灰岩敷石との隙間を埋めるための安山岩の偏平な間詰石が現位置で遺存している箇所があること、また、排水溝は、凝灰岩敷石の暗渠として玄室の雨水や湧水等を排水するために計画的に配置されていることなどから、これらの凝灰岩切石は当初から棺台基礎の周囲、すなわち玄室内全面に敷き詰められていた可能性が強いものと思われる。

凝灰岩切石の敷設順序としては、最初に棺台基礎の周囲・縁辺部にS-2のような同一の規格の切石を敷いてから、S-3の敷石のように側壁や奥壁との間に壁面の湾曲に合わせて整合するよう現地で加工・調整して敷設したものと考えられ、規格のわかるS-2の規模から合計約20枚程度の凝灰岩の切石が床面全面に敷き詰められていたことが推定される。

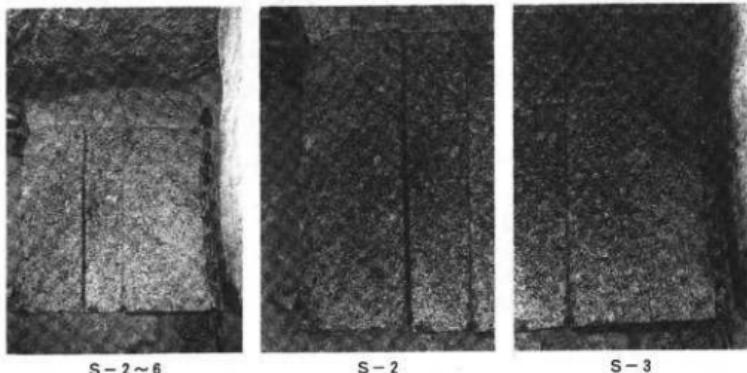


図7 玄室内凝灰岩敷石S-2～6検出状況概景

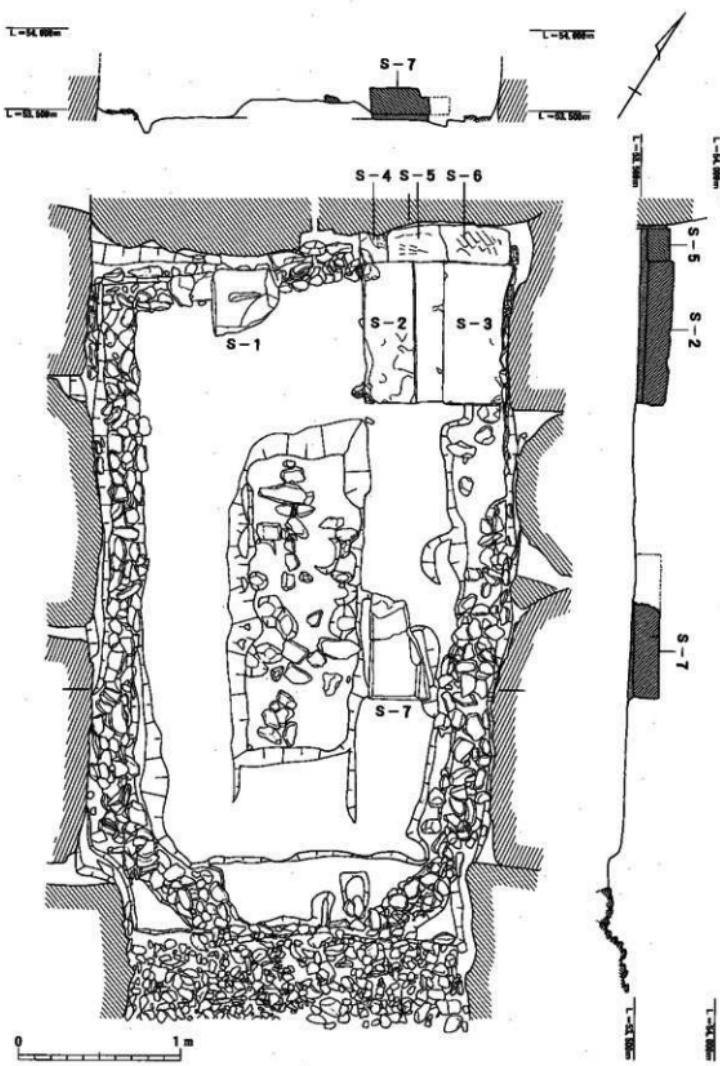


図8 平野2号墳玄室内平面・断面図 (S=1/30)

このような横穴式石室の玄室床面に凝灰岩の切石を敷石として敷く例は、7世紀後半と考えられる大阪府柏原市安堂6支群3号墳で1例知られているが、敷石は棺を置く部分のみ棺台として設置されており、横穴式石室の玄室の床面全面にわたって凝灰岩を敷く事例は他にみられない。敷石とは区別されるが、参考事例として大阪府南河内郡太子町御嶽山古墳では側面に格子狭間を作り出した凝灰岩の棺台を石室いっぱいに安置している。

凝灰岩敷石の突出部のもの意味・役割について、ただ単に、組合式石棺材や寺院基壇に伴う建築材等を転用しただけで意味をもたない設備であるのか、例えば、大阪府南河内郡太子町松井塚古墳のように突出部の上に削抜式家形石棺材の石室等の覆屋的な構造物を組み合わせるために意図的に作り出された設備なのか解釈の分かれるところである。

調査者自身の見解としては、凝灰岩敷石の突出部が棺台基礎と平行して設置されていることや棺台基礎上面に敷かれた疊上での高さがやや低いものの凝灰岩敷石の突出部の高さがほぼ同じであることなどから、棺台を立派に見せるための装飾的な意味合いと排水処理的な役割も兼ね備えて設置されたものと考えているが、棺台基礎西側の対称となる箇所で突出部を設けた凝灰岩敷石が遺存していないことからその証明は難しく今後将来の研究課題としたい。

#### (3) 棺について

玄室内からは通常法量遺物箱に換算して約130箱分の凝灰岩の断片や砂粉片が出土している。当初は、この断片が凝灰岩製の家形石棺等の石棺材と推定していたが、縄掛突起等の家形石棺と推定される凝灰岩製の石棺の部材は未確認で、これらの凝灰岩片は玄室床面に敷かれていた敷石である可能性が強いことや後述する棺台としての使用用途が考えられる墳の存在などから、平野2号墳の玄室内に納められた棺は石棺ではなく、木棺等の有機質の棺を使用していたものと考えられる。野外で実施した探別作業では木棺を塗布した漆膜片等は確認できなかったが、多数の炭化物等を採集しており、将来的にこの中から漆膜片等が検出される可能性もあり得るため、白木の木棺か否か、今後の遺物整理によって改めて検討したい。

#### (4) 築造時期について

石室内部からは帰属時期の明確な土器や副葬品が出土していないため、正確な築造時期は不明であるが、出土した僅かな須恵器片や石室形態等から東に隣接する平野1号墳（平野車塚古墳）よりもやや新しい7世紀中頃の築造時期が考えられる。

### 4 出土遺物

#### (1) 中世・近世の遺物

横穴式石室内からは、12世紀後半から16世紀にわたる中・近世の土器が出土している。玄室の表層からは下限を示す遺物として16世紀代の土器が散乱していることから16世紀以降に何らかの要因で横穴式石室の開口部に土砂が積もり外部から閉ざされたものと考えられる。

##### ① 土器

中・近世土器は、石室内のほぼ全域にわたって破片の状態で検出された。とくに玄室南東側の玄門付近では完形品を含む多数の土器の集積箇所がみられた。土器の器種としては、瓦器焼や羽釜、土師器皿、瓦質土器等の通常の日常雑器が含まれており、比較的土師器皿が多いように見受けられる。

## ②疑似米

玄室南東側の玄門付近では完形品を含む多数の土器の集積箇所がみられた。この中世土器の集積箇所のみ「疑似米」と称せられる米粒を模した土製品が多数出土した。疑似米は、いずれも米粒大の大きさで、赤褐色を呈する。焼成があまく、長年の雨水等の浸透により、もろく堅敏なものはない。このような疑似米は、奈良県宇陀郡大淀町越部古墳や兵庫県城崎町ケヤ古墳等の多数の古墳から出土している。仏具等の宗教行為の痕跡を示す遺物は何も出土しておらず、具体的な用途は不明であるが、何らかの祭祀に使用されたものと推定されており、当古墳でも中世に石室を利用した祭祀が執り行われていた可能性が考えられる。

## ③錢貨

玄室内には部分的に長年の雨水等の浸透により石室のすき間から侵入した土砂が数cm堆積していた。この土砂を取り除くと玄室の中央部より北方の奥壁にかけては約10cmにわたって炭化物を含む炭層が堆積しており、この炭層の分布範囲に破片も含む錢貨約16枚が出土した。遺存状態が悪いが、錢種は、大別して「無文錢」と宋錢の「永樂通宝」の2種類に分けられる。

### (2) 古墳時代の遺物

上述したとおり中世に玄室内に設置されていた凝灰岩の敷石が何らかの理由で徹底的に玄室内から抜き出されており、また、玄室床面の最下層まで中世土器が混入している状況で、純粹な古墳時代の遺物を含む層域は検出されなかった。

古墳に伴う副葬遺物と推定されるものは、極めて少なく、須恵器の破片数点や刀子状の断片1点と用途不明の鉄片数点に過ぎないが、特筆すべき遺物として凝灰岩と壙状遺物がある。

#### ①凝灰岩

出土遺物の中では通常法量の遺物箱約130箱分にも及ぶ多数の凝灰岩の破片や粉碎片が出土している。原型を保つものはなく10cm四方のものが多く見られる。現在までのところ確実に石棺の部材と確認できるものはないことから、これらの凝灰岩の破片は玄室床面全面に敷かれていた凝灰岩の敷石の部材と考えられる。

#### ②壙

石室内からは多数の壙状遺物が出土している。出土状況は、凝灰岩の破片とともに散乱した状態で出土するものが多く、原位置を保って出土したものは1点も認められなかったが、石室内での出土位置は、玄室内や玄門付近での出土数が最も多く、狭道の南端に向かうにつれて出土量は少なくなる傾向がある。

壙状遺物は、現在遺物整理中ではあるが、大別して高さ約8cm、側辺の厚さ約1.2cm~2.2cm前後、底の厚さ約1.2cm~2.2cmの箱型の浅い容器状を呈するものの破片と、短辺約17.1cm~20.5cm、厚さ約1.2cm~1.5cmの長方形の薄い平板状を呈するものの破片の2者に分類される。平板状を呈する壙は、さらに、短辺約17cm、厚さ約1.2cm~1.5cm、長辺約25cm以上のものと、短辺約20.5cm、厚さ約1.2cm~1.5cm、長辺約31cm以上の数種に分類できる。

壙は、両種とも全て赤褐色の土師質を呈し、器面の調整は、平板状を呈する壙は、両面ともハケ調整が施される。箱型の浅い容器状を呈する壙は、内面はハケ調整であるが、底部外面と推定される面は部分的にヘラケズリが施されるものの布目庄痕を残すなど未調整の箇所を多く残しており、この面が表面になるとは考え難いことから箱型の容器を推定するに至った。

埠のうち、平板状を呈する埠については、近隣では二上山西麓から南西麓の南河内地方の終末期の横口式石槨を主体部とする古墳から多く検出されている。いずれも原位置を保って出土したものは少なく、各古墳ごとに使用用途が解明された例は少ないが、埠の使用用途について、日本では床面や側壁等の横穴式構造を構築する部材、棺台や棺敷、床敷、閉塞施設、石槨の周囲の間詰用材としての使用用途が考えられるほか、朝鮮半島では百濟・公州熊津洞古墳等の事例から排水溝の暗渠の蓋等の使用用途も考えられる。

古墳から出土する埠の出土状況としては、平板状を呈する数枚から数十枚程度の埠が単独で出土する例が多く、当古墳のように平板状と箱状を呈する形状の異なる2者の土師質の埠が出土する例はないが、参考例として、大阪府堺市檜尾塚原2号墳では平板状の埠と陶棺に使用されたと考えられる底部外面に円筒の脚を付した箱型の容器状を呈する埠の2者が出土している。

当古墳では、出土数や形状から平板状を呈する埠については、木棺等の棺を安置したり、棺の高さを調整したりするための棺敷等の棺台の一部としての使用用途が考えられ、具体的な使用用途としては、玄室中央部に設置された棺台基礎の上面に敷かれていた可能性が考えられる。

また、箱型の浅い容器状を呈する埠については、その形状から陶棺等を構成する棺材の一部と考えていたが、棺を収納するには容器の高さ（内法）が8cmと低いことから陶棺の身部と解釈するにはやや難があり、また、前述したように布目压痕等の未調整の箇所を残す面が表面、すなわち、蓋と解釈することも難しい。このような埠と同種のものか否かは不明であるが、形態的に最も類似するものとしては、前述した檜尾塚原2号墳出土陶棺や大阪府南河内郡河南町塚廻古墳出土綠釉陶棺等が挙げられる。当古墳から出土した埠の使用用途は不明であるが、今後の接合作業によって玄室中央部の棺台基礎と同等の規模で棺材に復元することが可能であるならば、木棺等の棺を収納するための外容器の可能性が最も強いと考えられるが、全く別種の供物や副葬品を置く台等の可能性も考えられ、今後の遺物整理作業によって改めて検討して行きたい。

## 5 調査の成果

平野地区に残されていた江戸時代の古絵図から平野2号墳が古墳であったことは知られていたものの、現代まで横穴式石室は閉ざされており、横穴式石室の形態等について学界では全く不明であったが、今回の発掘調査によって貴重な未知なる横穴式石室の発見に至った。

平野2号墳の横穴式石室は、花崗岩の巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てて構築していることが特徴的であり、石積技法や石室の形態、両古墳の採集遺物等から隣接する平野1号墳よりもやや新しい要素をもつ横穴式石室であることが判明した。

平野塚穴山古墳の築造時期は不明確ではあるが、従来通り7世紀後半に比定すると、平野古墳群の中で現存するものでは横穴式石室を内部主体とする平野1号墳から平野2号墳、そして、切石積の横穴式石室からの系譜が考えられている横口式石槨を主体部とする平野塚穴山古墳へと平野古墳群中の古墳の変遷を解明することができたのをはじめ、大和における7世紀の終末期の古墳の変遷を考えるうえで新たな資料を追加することができた。

また、平野2号墳の横穴式石室は、玄室内部の床面の中央部に土で築き固めた棺台状の突出部を基礎（土台）として設け、床面全面に二上山の産出する凝灰岩の切石を敷石として使用した横穴式石室としては類例のない極めて特異な構造・埋葬形態を持つ古墳であることが判明した。

7世紀後半頃には平野古墳群西端の平野塚穴山古墳のような、床面や側壁、奥壁、天井石等の全てに二上山の産出する凝灰岩の切石を組み立てて石室を構築する一種の横口式石槨を主体部とする古墳が突如として出現し、この種の石室構造を祖型とする凝灰岩を使用した古墳が以後、7世紀後半から8世紀前半にかけて、飛鳥地域の高松塚古墳や春午子塚古墳、マルコ山古墳等の被葬者像として天皇・皇族級の高位の人物が推定される古墳の主体部として採用される。

凝灰岩を使用して石室の一部を構成するという意味において、平野2号墳の横穴式石室には平野塚穴山古墳等の後の凝灰岩を組み立てて構築した横口式石槨に統く、その先駆的な要素が秘められているように考えられ、多様性のある飛鳥時代の古墳を考えるうえで極めて重要な資料になるものと思われる。

横穴式石室の玄室床面全体に敷設された凝灰岩や玄室中央部に構築された棺台基礎をはじめ、2種の壙の使用用途や系譜等、終末期に築造された古墳の墓室構造・埋葬形態・変遷を考える上で、今後、検討すべき課題が多々残されている。

本概報では時間と紙面の都合上、精緻な報告書を作成するには至らず、概要を記すに尽きてしまったが、後日本報告書の刊行によりその責務を果たしたい。

## 文 献

- 1) 香芝市教育委員会編 1998 「尼寺北廃寺(尼寺廃寺第14次調査)」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報9」香芝市教育委員会
- 2) 香芝市教育委員会編 2000 「平野2号墳第1次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13」香芝市教育委員会
- 3) 泉森 敏 1984 「竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32番 奈良県教育委員会
- 4) 千賀 久 1983 「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1982年度」奈良県教育委員会
- 5) 泉森 敏 1999 「六 平野塚穴山古墳と斑鳩文化」「近畿の古墳文化」学生社
- 6) 泉森 敏 1976 「古墳時代」「香芝町史」香芝町役場
- 7) 前掲2文献
- 8) 安村俊史・石田成年 1986 「高井田遺跡I」「柏原市文化財概報1985-VII」柏原市教育委員会
- 9) 水野正好他 1972 「近飛鳥遺跡分布調査概要II」大阪府教育委員会  
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 「飛鳥時代の古墳」奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
- 10) 大阪府教育委員会編 1958 「松井塚古墳調査概要」大阪府教育委員会  
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 「飛鳥時代の古墳」奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
- 11) 河上邦彦・本村充保 1997 「越部古墳」奈良県文化財調査報告書第82集 奈良県立橿原考古学研究所
- 12) 瀬戸谷皓 1987 「上山・ケゴヤ古墳」城崎町文化財調査報告9 城崎町教育委員会
- 13) 金 基雄 1976 「百濟の古墳」学生社
- 14) 宮野淳一 1990 「陶邑VII」大阪府文化財調査報告書第37号 大阪府教育委員会
- 15) 北野耕平 1985 「考古編」「富田林市史」第1巻 富田林市役所

### III 尼寺北廃寺第16次調査

#### 1 位置と環境

尼寺廃寺は奈良県香芝市尼寺に所在する飛鳥時代末～白鳳時代に創建された寺院跡である。古くから尼寺の集落内で蓮華紋軒丸瓦など古代の瓦が多く出土することから寺院跡の存在が考えられた。しかし、礎石が残る基壇が南北約200m隔てて存在し、瓦もその部分を中心に分布していることなどから、南北2つに分かれる寺跡（北廃寺・南廃寺）と考えられている。

北廃寺は平成3年度から平成9年度まで範囲確認調査を実施し、東向きの法隆寺式伽藍配置と推定されている。なかでも塔跡の調査（第10次調査）では日本最大の心礎柱座から耳環などの舍利荘儀具が出土し、さらに、塔基壇構築法がはっきりするなど多大な成果があった。

一方、南廃寺は役行者をまつる薬師堂に原位置を保つ礎石がいくつか残っており、その西約50mにある般若院境内でかつて多くの軒瓦が出土したことから、伽藍がこの周辺に存在したと推定されている。しかし、これまでの調査では直接伽藍に関係する遺構等は検出されていない。

#### 2 調査の概要

今回の調査は個人住宅の建て替えに伴う調査で、北廃寺の東面回廊及び中門推定地である。しかし、すでに既存建物の解体が終わり、新築建物の基礎工事が完了していたことから、調査可能な範囲において遺構の遺存状態と中門の有無を確認することを目的に調査を実施した。

すでに、今回の調査地の北側で東面回廊を確認（第14次調査）していることから、回廊の位置を調査地内で復元したところ、回廊内側の大部分は基礎の下であるが、外側は調査可能な位置にあった。そこで、この部分を確認するため東西4m、南北6.75mのトレンチ（Aトレンチ）を設定して人力で掘削した。その結果、推定地通りの位置で回廊外側のラインが検出され、基壇構築に伴う版築土も確認された。しかし、このトレンチでは回廊が南北にのびていることは確認できたが、中門とのとり付きは確認できなかった。

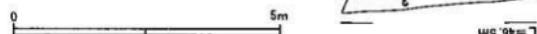
そこで、中門の有無と回廊内側を確認するため、基礎の南側のわずかな空間に東西方向のトレンチ（Bトレンチ、南北0.7m、東西11.25m）を設定し人力で掘削した。その結果、基壇に伴う版築土が回廊幅（5.9m）より広い範囲（約9.5m）で検出され、平面においても堆積の違いが確認された。これにより、中門の存在が確実となり回廊から中門の出が東西とも約1.8mであることがわかった。また、蠟羽瓦も焼け落ちた状態で1点出土し、この位置に切妻造の建物、つまり、中門があったことは確実であろう。そこで、回廊と中門のとり付きを確認するため、調査可能な中門基壇外側の部分をAトレンチの



図9 調査地位置図 ( $S=1/1,000$ )  
(上が北、数字は調査次数を示す)

方向に向かって  
拡張し掘削した。  
しかし、この位  
置は既存建物の  
汲み取り式トイ  
レの位置にあた  
り、壁面で土層  
を確認しながら  
慎重に掘り下げ  
たが、既に地山  
まで掘削が及ん  
でおり構造は全  
く検出できなかっ  
た。しかし、こ  
の部分で中門が  
回廊にとり付く  
ことは確実であ  
ろう。

- 1 暗灰褐色土（耕作土）
- 2 緑褐色土（水田底土）
- 3 暗褐色土
- 4 棕褐色土（堅土地）
- 5 灰色砂質土（黄褐色粘土塊含む）
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土（棕褐色粘土塊含む）
- 9 暗褐色土
- 10 黄褐色砂質土（鉄分多く含む）
- 11 暗黃褐色土
- 12 暗黃褐色土
- 13 明黃褐色土
- 14 暗皮褐色土
- 15 暗褐色土
- 16 暗褐色土
- 17 黄褐色砂質土（旧底土）
- 18 暗褐色砂質土（灰まじり）
- 19 暗褐色砂質土
- 20 灰褐色砂質土（粘土塊含む）
- 21 灰褐色砂質土（炭混じり）
- 22 暗褐色土
- 23 暗黃褐色土（小石混じり）
- 24 棕褐色土
- 25 暗褐色土
- 26 明黃褐色土（炭・灰色粘土塊含む）
- 27 明黃褐色土
- ※ 5~10は埴土



### 3 調査の成果

今回の調査で  
はこれまで推定  
であった中門を  
平面及び基壇を  
構築する版築土

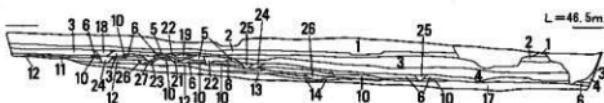
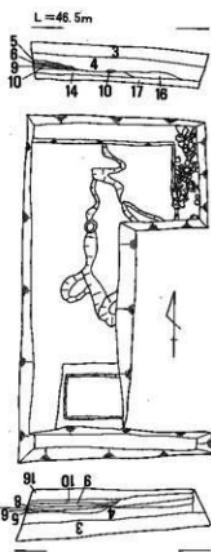


図10 A トレーナー平面図、北・南壁断面図、B トレーナー北壁断面図

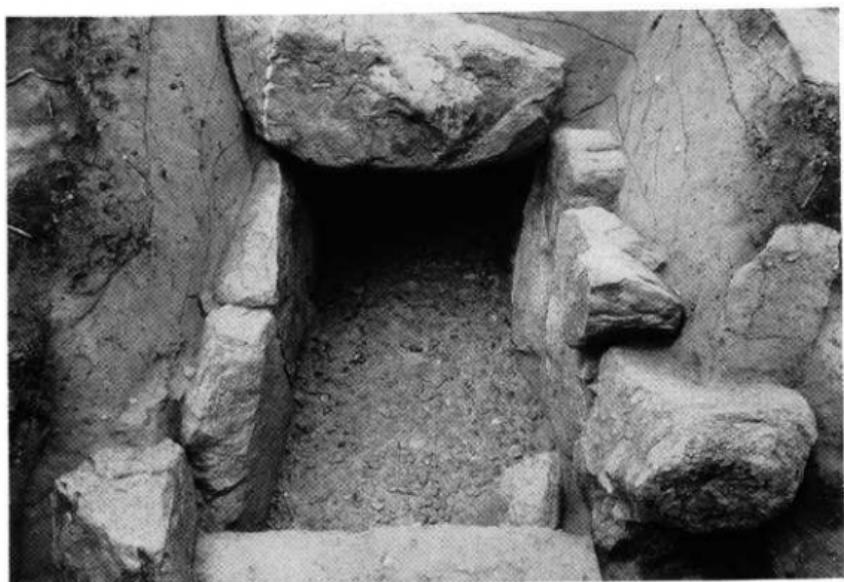
によってその存在を確認した。このことによって、これまで推定であった東向きの法隆寺式伽藍配置が確定した。なお、既に基礎工事が行われた部分については、その南側で設定したトレーナーで、基礎が地下構造に影響を与えていない可能性が高いことを確認しており、将来的に調査する機会があれば回廊と中門のとり付き等が検出されるであろう。

### 文 献

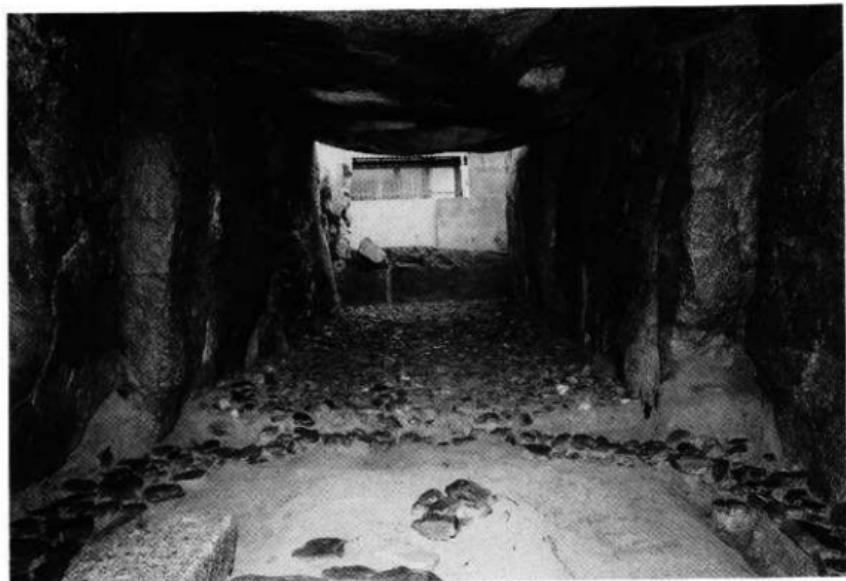
- 香芝市教育委員会 1992『尼寺庵寺北遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1993『尼寺庵寺南遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1994『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報1』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1995『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1996『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報5』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1997『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報7』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会 1998『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報9』香芝市教育委員会



# 写 真 図 版



1. 渋道完掘状況（南から）



2. 玄室より渋道を望む（北から）



1. 調査前の状況  
(東から)



2. 奈道天井石  
側壁検出状況  
(南から)



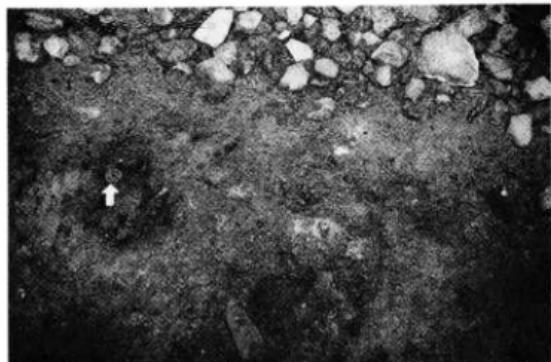
3. 奈道土層堆積状況  
(南から)



1. 玄門付近狭道  
土層堆積状況  
(南から)



2. 玄室・狭道内  
調査前の状況  
(北から)



3. 玄室内表層除去後の  
縦層内鉢貨出土状況  
(南から)



1. 玄室内瓦器等の  
中世上器出土状況  
(西から)



2. 玄室内凝灰岩  
・埴出土状況  
(西から)



3. 玄室内調査過程  
・遺物出土状況  
(南から)



1. 玄室内完掘状況  
(南から)



2. 棺台基礎検出状況  
(南から)



3. 玄室内排水溝・棺  
台基礎等検出状況  
(北から)



1. 玄室奥壁沿いの凝灰岩散石検出状況  
(南から)



2. 玄室奥壁沿いの凝灰岩散石及び玄室西側壁と凝灰岩散石との隙間を詰める小石の検出状況  
(東から)



3. 玄室棺台東側の凝灰岩散石検出状況  
(西から)



1. 塚道西側壁  
(東から)



2. 塚道西側壁を玄室東側から望む  
(北東から)



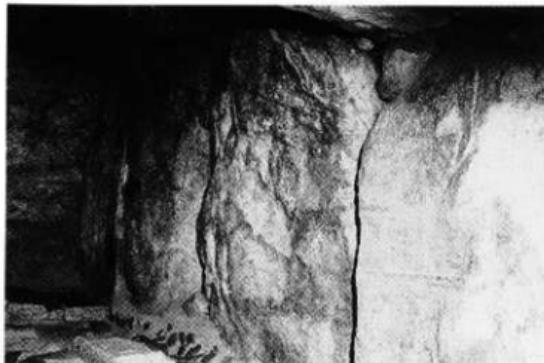
3. 玄室西側壁を塚道東側から望む  
(南東から)



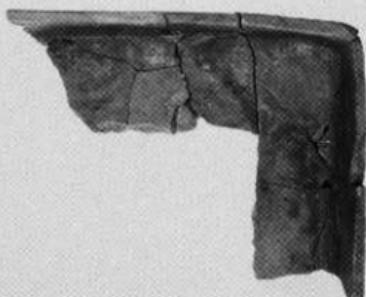
1. 美道東側壁  
(西から)



2. 美道東側壁を玄  
室西側から望む  
(北西から)



3. 玄室東側壁を美  
道西側から望む  
(南西から)



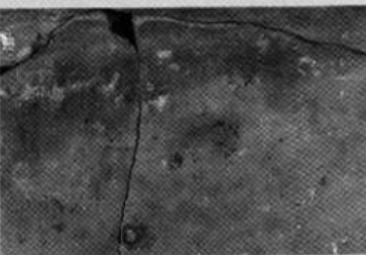
容器状を呈する埴・内面（真上から）



容器状を呈する埴・底部外面の布目压痕



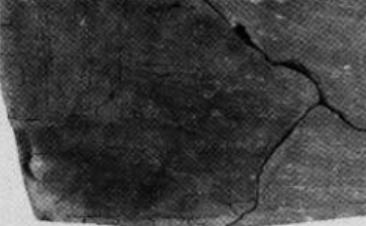
容器状を呈する埴・内面（斜め上から）



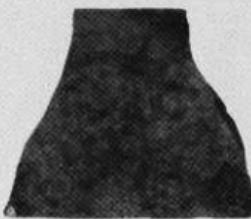
容器状を呈する埴・底部内面の調整（真上から）



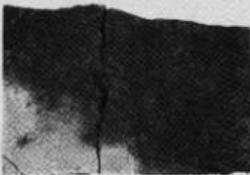
容器状を呈する埴・側辺外面（斜め上から）



容器状を呈する埴・側辺外面の調整（真横から）



平板状を呈する埴（真上から）



平板状を呈する埴（真上から）



1. Aトレンチ回廊  
検出状況  
(北から)



2. Aトレンチ北壁断面  
(南から)



3. Bトレンチ全長  
(南西から)

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうにねんど かしばしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう ジゅうよん						
書名	平成12年度 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 14						
副書名							
巻次							
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号	14						
編著者名	下大迫 幹洋(平野2号墳第2次調査)、山下 隆次(尼寺北廐寺第16次調査)						
編集機関	香芝市二上山博物館						
所在地	〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号						
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。 。 。 。 。 。	東経 。 。 。 。 。 。	調査期間	調査面積	調査原因
平野2号墳 第2次調査	奈良県 香芝市 平野 1043番地	292109 128	34度 33分 51秒	135度 42分 01秒	20000711 ~ 20010330	36m <sup>2</sup>	範囲確認 調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	古墳	古墳時代	横穴式石室 板灰岩敷石	板灰岩、 土師器、瓦質土器、 瓦器、須恵器、銭貨	今回の調査でこれまで未確認であった 横穴式石室を検出した。 玄室中央部に棺台の基礎と推定される 土台を設け、棺台基礎の開闢、玄室全 面に二上山産の板灰岩の切石を敷石と して敷く特異な構造を持つ古墳である ことが判明した。		
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。 。 。 。 。 。	東経 。 。 。 。 。 。	調査期間	調査面積	調査原因
尼寺北廐寺 第16次調査	奈良県 香芝市 尼寺2丁目 66-2,66-3	292109 143	34度 34分 15秒	135度 42分 13秒	20000809 ~ 20000824	30m <sup>2</sup>	自己用専用 住宅建築に 伴う事前調 査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	寺院	奈良時代		瓦片等	東面北回廊と中門基壇の一部を検出		

---

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 14

— 平成12年度 —

2001(平成13)年3月31日

編集 香芝市二上山博物館

〒639-0243 奈良県香芝市麻山1丁目17番17号

電 0745-77-1700 FAX 0745-77-1601

発行 香芝市教育委員会

〒639-0244 香芝市本町1397番地

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

---